2021年12月発行

CWS JAPAN NEWSLETTER NO. 63

いつもCWS Japanの活動に温かいご支援、
ご理解をいただき、ありがとうございます

2021年も大変お世話になりました

皆様、2021年の年の瀬を迎え、本年も変わらずご支援・ご協力いただき、心より感謝致します。特に年末に実施致しましたアフガニスタンの緊急支援では、たくさんの方々の励ましやご支援を頂き、改めて皆様に支えられている人道支援なのだとチーム一同心を新たに致しました。

2021年はたくさんの自然災害や紛争が起こりました。それにより家を追われた方々が第二次世界大戦後、最大に上ると懸念されます。人間は温かい人道の心を持つと同時に、争いや危機を生み出してしまう事も残念ながら散見されます。ただ、地球という規模で見た時、誰もが限られた資源を共有する仲間であり、限られた命の時間をそれぞれが持っているかけがえのない存在なのだと感じます。私どもは「たった一人のためにでも」という精神を大切にし、社会のリソースを効果的に繋げ、繋がりを大切にし、一つ一つ課題解決に向かって進んで参ります。

2022年は今年より多くの方に平和と平穏が訪れる事を願ってやみません。改めまして、皆様とのご縁に心より感謝申し上げます。

（文：事務局長　小美野　剛）

OUR SNS IS ACTIVE!

FACEBOOK
TWITTER
INSTAGRAMでも
情報発信しています！

最後のページを
ご覧ください

写真

CWS Japan事務局スタッフ集合写真

中間報告：インドネシアでサイクロン・セロージャ被災者緊急支援

2021年4月5日にインドネシア東ヌサ・トゥンガラ州に上陸したサイクロンによる豪雨と強風は同地に、洪水、地滑り、鉄砲水などの災害被害をもたらしました（詳細はニュースレターNo.58）。この状況に対し、CWS Japanは現地のパートナー団体、CWS Indonesiaと連携し、ジャパン・プラットフォーム（JPF）の助成のもと、緊急支援を開始し、緊急シェルターキットや衛生用品の物資配布、汚染された井戸の修復、そして対象コミュニティを基盤とした防災活動の促進を行ってきました。

写真

被災地を洪水が襲った時の様子

防災活動は、より詳細に言うと、どのように災害が発生したのか、また地域における災害のリスクはどこにあるか等への理解を深めるために、災害リスク評価およびハザードマップ作成を行っています。そして、最終的に被災コミュニティと協働で防災アクションプランを作成し、防災に向けてとるべきコミュニティのアクションを明確にする予定です。

当活動の中で、現地の被災者にサイクロン発生時にどのような避難行動をとったのか等をインタビューした結果、次のようなことが分かりました。

写真

被災者が浸水の高さを示している。

- 洪水は通常、年に2～3回発生しており、今回のような大規模災害ではないにしても、毎年4月か5月あたりに被災地の人々は洪水を経験していたこと。
- そのため、洪水の被害を避けるため、雨季のピーク時前にトウモロコシなどの農作物が収穫されるように、早めに植えていたりしていること。
- 家屋周辺にあるチークの木が密集して植えられていたエリアがあり、流れてきた水の勢いをとどめ、大きな土砂をおさえたために、その家屋には届くまでには水の勢いも緩やかになり、土砂の量も減っていたこと。
- しかし、災害（洪水）が直撃する前に、被災者によって事前にとられた行動や避難行動は、被災者個人の経験や地域の慣習に基づいて個々に決定され、実行されていること。その中には、教会の鐘が長く鳴らされたとき、カエルが鳴いたときなどのサインを頼りにしている人々もいたこと。
- 最も深刻な影響を受けたものの一つとして、農地や家畜の損失などの経済的損失が挙げられ、将来の洪水リスクをどのように軽減できるのか住民たちは心配していたこと。

”他のアクターとの連携を通して進めていくべき防災活動についても協議する、よい契機になるように心掛けています。”

これらのインタビュー結果をもとに、現在、まずはコミュニティ内でできる災害リスク軽減活動について、話し合っています。持続可能的かつ住民の方々が大事だと思うものを守れるような行動の特定することが目標ですが、同時に中長期的に現地政府等の他のアクターとの連携を通して進めていくべき防災活動についても協議する、よい契機になるように心掛けています。

（文：プログラム・オフィサー　西澤紫乃）

クラウドファンディングへのご協力、ありがとうございました

2021年11月4日から12月13日にかけての39日間で「困窮するアフガニスタンの人々の生命と生活を守るための支援（越冬支援）」にかかるクラウドファンディングを実施しました。39日間で102名の皆様から計141万5千円もの温かいお支援をお寄せいただきました。また、同時に大変励みとなる応援メッセージもいただくことができました。さらに、多くの方にクラウドファンディングの情報拡散にもご協力いただきました。改めましてご協力いただきましてありがとうございます。重ねてお礼申し上げます。

日本の冬も本格化してきましたが、アフガニスタンの冬もいよいよ厳しさを増しております。クラウドファンディングの期間は終了しましたが、皆様からお預かりしたご支援をアフガニスタンに届け、困難な状況にある人々に届けるCWS Japanの活動はこれからが本番です。活動の具体的な進捗状況や現地の最新情報は、ホームページや各SNS で発信を続けます。皆様にも引き続き気に掛けていただき、応援いただければ幸いです。

CWS Japanとしては、久しぶりかつ初めての本格的なクラウドファンディングへの挑戦でした。60世帯の困窮するアフガニスタンの家族が厳しい冬を越すために必要となる現金を給付することを目指して、300万円の目標を設定しましたが、残念ながら目標額に届くことはできませんでした。しかしクラウドファンディングという新たなチャンネルを通じてアフガニスタンの苦しい状況とCWS Japanの活動を知っていただく機会になったのは、大きな意味がありました。

> ″アフガニスタンの苦しい状況とCWS Japanの活動を知っていただく機会になったのは、大きな意味がありました。″

写真
屋外で暮らす母子家庭。夫と息子は避難途中に銃撃戦で亡くなっています。

”今後も困難に直面している人々や支援の届きにくい人々と、皆様の温かく優しいお気持ちを繋ぎ、具体的な支援活動が実施されるように努めてまいります。”

今回はall-inという目標額の到達有無を問わず、お寄せいただいたご寄付を受けることができる方式だったので、皆様からお預かりした分は現地にしっかりと届けることができます。

目標額を達成できなかった分は、他の助成金やご寄付等と合わせて、当初の60世帯という支援対象者の目標に少しでも近づき、またはそれを超えて、一人でも多くの人々の生命と尊厳を守れるように取り組みたいと思いますので、皆様にはご支援を引き続きお願い申し上げます。

ニュースで地方から避難したテント暮らしの家族を拝見しました。食べ物もなくお茶を飲むことしかできないとのこと。あの家族は今どうしているのか。何か自分に出来ることはないか考えているときにこの支援に出会いました。どうか少しでも彼らの助けになりますように。

一人でも多くの命が救われますように。

アフガニスタンの歴史的な窮状に何ができるか。支援のプロとしてがんばってください。支援者の一人として、応援したいと思っています。

幼い女の子が嫁ぎ先の男性の元へ引きずられながら連れて行かれる様子をテレビで見てから、自分にできることはないかと考えていました。

アフガニスタンの現状をテレビで見て出来るだけ末端の人に直接届くものをと思ってこの活動を支援しました。情勢不安のアフガニスタンで大変と思いますが頑張ってください。少しでもたくさんの人に届く事を願っています。

アフガニスタンの人々と私たちとのあいだに少しでも心の絆が生まれますように。

厳しい状況に置かれているアフガニスタンの皆様に、少しでも自分にできることが見つかり、わずかではございますが支援させていただきました。
この冬をどうか無事に乗り越えてくださいますようにお祈りしております。
よろしくお願いいたします。

写真

支援者様からの応援コメント一部抜粋

今後もCWS Japanは困難に直面している人々や支援の届きにくい人々と、皆様の温かく優しいお気持ちを繋ぎ、具体的な支援活動が実施されるように努めてまいります。

（文：プログラム・マネージャー 五十嵐豪）

STORY WITH OUR PARTNERS
-パートナーの声

2011年3月11日に発生した東日本大震災から10年が経ちました。

CWS Japanはそこから10年間、ともに活動する仲間を増やし、多くの方々のご支援とご協力、温かいお言葉に支えられながら、国内外の災害・防災支援に携わることができました。その活動の多くは、わたしたち単独でできるものではありませんでした。

当時から現在に至るまで、わたしたちがこだわっているのは「パートナーシップ」です。

今後も、同じもしくは他のセクターで活躍されているパートナーとの連携やネットワーク構築を通して、災害時に支援の手が届かず取り残される人々のいない社会の実現を目指していきます。

そのために、この10年という節目を迎え、これまでのわたしたちの活動によるインパクトを客観的に振り返るとともに、今後の活動に向けて、改善課題を抽出すべく、何名かのパートナーの皆様へインタビューをさせて頂きました。

CWS JAPANを内部から支える人たち VOL.2

インタビュー相手: ショウ ラジブ様
（慶應義塾大学 政策・メディア研究科 教授
/CWS Japan 理事長）

ーCWS Japanを知ったきっかけはなんですか?
2007～2008年頃に京都大学に勤務している時に、現在は国連防災機関（UNDRR）で、当時の国連国際防災戦略（UNISDR）の活動の一環として、災害リスク軽減に関連する伝統的な知識・知恵についてまとめることになり、世界各地の事例を公募したところ、パキスタンの地すべり対策事例を、当時CWSのパキスタン事務所に勤めていた小美野さん（現CWS Japan事務局長）が執筆したことから、CWSのことを初めて知りました。現地の人々の独自の対策や知恵などが非常に興味深く書かれていたのを覚えています。出版物の中にもその事例を入れるべく、発表のために京都に小美野さんを招き、そこで直接会いました。

その後、私が理事として関わっているSEEDS AsiaとCWSとの連携を経て、2015年から理事としてCWS Japanに関わるようになりました。

"CWS Japanは他のアクターの手が届いていない支援のギャップを埋めるために奔走している組織であり、最も脆弱で最も支援を必要としている人に手を差しのべる努力をしている団体であるということです。"

ーCWS Japanと連携して良かったことはなんですか?
CWS Japanが日本で設立する以前から、CWSと協働して事業を実施する機会がありました。2008年にミャンマーでサイクロン・ナルギスが発生した時です。私はSEEDS Asiaの理事として、なにか支援活動ができないかと思い、発災から数か月後に現地訪問しました。そこで、Mobile Knowledge Resource Center（MKRC）という防災啓発のための移動式防災教室を支援として行うことを考えました。トラックを購入して、地震、土砂崩れ、洪水の仕組みが理解できるような簡易的な模型を導入し、学校や村を行き来するという防災啓発プロジェクトです。当時CWSのバンコク事務所にいた小美野さんと一晩中、このアイディアについて語り合いました。気づいたら朝の3時や4時になっていました。小美野さんとご飯に行くと大抵このスケジュールになります（笑）。

この移動式防災教室という事業の実現のためにパートナーとして資金提供や企画をサポートしてくれたのが、CWSでした。支援活動の現場に当時のミャンマー政府の大統領が視察しに来るなど、ミャンマー国内でも注目される事業となりました。その後も、水上での移動も可能にし（Water Knowledge Resource Center: WKRC））、陸の移動はトラックで、水上ではボートでと使い分け、ミャンマー全土の学校やコミュニティの間で防災教育を推進していきました。CWSのネットワークを活かして、パキスタンのカラチでもMKRCを実施しました。最終的にこれらの移動式防災教室の運営は現地のパートナーに移転されていて、継続されています。他にも2011年に起きた東日本大震災の際に、これまでの連携の経験を活かして、SEEDS Asia、京都大学、そしてCWSの三者で連携して気仙沼、釜石、名取で2011年から5年間支援活動を実施しました。
これらのパートナーシップ連携を通して感じるのは、限られたリソースで有効な支援ができたということです。公的機関による援助にはないような柔軟性があっただけでなく、支援内容を熟考することに時間と労力を注げたことで、インパクトの高い事業の設計ができました。

理事として組織内部から関わっていき、見えてきたのは、CWS Japanは他のアクターの手が届いていない支援のギャップを埋めるために奔走している組織であり、最も脆弱で最も支援を必要としている人に手を差しのべる努力をしている団体であるということです。このような軸をもっと明確にし、強化し、効果的にリソースの投入をしていってほしいと思います。

ー防災支援・緊急人道支援で大切にしているアプローチや課題を教えてください。
まずは現地のニーズに耳を傾けることが重要だということです。それをなくして支援計画を全部固めていかない方がいいと思っています。聞き取った全てのニーズを漏れなく対応することはできませんが、聞き取った数々の現場のニーズと組織のミッションやマンデートとの適切なマッチングをすることが大切です。

"教訓の抽出と発信は今後も重要な活動になると考えています。”

ーCWS Japanへのアドバイスや今後に期待することはなんですか?
期待することはたくさんありますが、そのなかでも主に3つあります。まず一つは、大勢がやっていることに追随するのではなく、CWS Japanの団体としてのユニークな強みを、理事を含め組織全体で理解し、認知することです。CWS Japanは最も脆弱な人の支援に奔走している団体で、それを誇りに思うことです。

そのうえで、二点目としては、専門性の高いアウトプットやインパクトを出せるように、組織として効果的にリソースの投入をしていってほしいと思います。昨今、防災の取り組みはダイナミックに変わってきています。コミュニティベースの活動でも、コミュニティとの連携の方法、コミュニティ・マネジメント、コミュニティ内の意思決定のプロセスの分析、コミュニティと自治体や行政との連携などいろんな観点でノウハウの蓄積や専門性が求められていると感じています。

最後は、教訓の抽出・記録し、発信する活動を継続していくということです。教訓の抽出と発信は今後も重要な活動になると考えています。災害のリスクや課題は一つ一つがユニークで、多様である分、課題解決の方法も多様になります。そのような貴重な教訓や経験を持っているのに、それを発信できるキャパシティーのある組織が限定的であるなかで、CWS Japanがこの活動を率先してやっていることは意義があり、継続していってほしいと思います。

インタビュー相手: 田島 誠 様

（特定非営利活動法人 環境エネルギー政策研究所（ISEP）理事・特任研究員/CWS Japan理事）

ーCWS Japanを知ったきっかけはなんですか?
小美野剛さんに最初にお会いしたのは2011年の初頭、東日本大震災の震災支援絡みの懇親会だったと思います。当時の職員の伊藤洋子さんもご一緒でした。ネットワーキングや情報収集を兼ねてあらゆる集まりに軒並み参加していたのでどこの集まりだったか記憶していませんが（笑）。当時私は日本国際協力NGOセンター（JANIC）の震災タスクフォースのリーダーを務めていましたが、その頃既にCWS JapanとはJANICの別部署が人道支援における被災者の人権（スフィア・スタンダードやHumanitarian Accountability Partnership(HAP)など）の啓発活動を一緒に始めていたと記憶しています。

"「パートナーシップ」と「伴走」、そして不確実な現実にも飛び込む「勇気」と「柔軟性」を持って、「必要とあれば何でもやる姿勢」でした。"

JANICは国際協力に関わるNGOのネットワーク団体なので、現場での事業に関わった組織的な経験や人材、予算の全てがありませんでした。ある意味でゼロからのスタートでした。震災直後チームを立ち上げた時は私一人で、事業実施体制やネットワーク構築、資金調達に奔走していました。懇親会の席上、その窮状と今後の構想を話すと、驚くべき事に小美野さんからは即座に「いいですね。一緒にやりましょう！」という言葉が返ってきたのです。初対面で事業計画書を提示することもなくその場で協力の方向性が確定した瞬間でした。

ーCWS Japanと連携して良かったことはなんですか?
緊急期の流動的な状況でとても柔軟に協力してくれた点と、パートナーシップを重要視して伴走支援をしてくれた点です。

海外から名だたる国際協力NGOが震災支援に駆けつけましたが、海外からの人材受入に対する日本の門戸は高く、ほとんどの団体が資金協力のみに切り替えざるを得ませんでした。CWSもその中の一つでしたが、CWSが際立っていたのはその支援方針と理念でした。具体的には「パートナーシップ」と「伴走」、そして不確実な現実にも飛び込む「勇気」と「柔軟性」を持って、「必要とあれば何でもやる姿勢」でした。

実は、これらは国内であろうと海外であろうと緊急救援には欠かせない視点だと私は考えています。CWSは単に資金を提供するだけではなく、緊急期のプログラム形成を非常に柔軟にサポートしてくれました。私はこうしたCWSの理念に強く共感したことから、最も苦しいときに支えてくれた恩返しという意味も込めて2014年から理事としてCWS Japanが日本に根付くお手伝いをさせてもらってます。

スフィア・スタンダードの主流化等、インパクトが見えにくい分野や知名度の低い課題に対しては、対策が必要だと思われていても、なかなか資金が集まりにくい傾向がありますが、そのような分野に対して、資金を提供してくれたのがCWSでした。CWSはグローバルな視点を持ちつつ、持っているノウハウを日本に現地化するという視点も持っていました。支援が難しかった福島に早期に事務所を開設できたのもCWS Japanともう一つの国際NGOのおかげでした。

必要だけども誰も手をつけたがらない課題に取り組むことは容易ではありません。困難であるからこそ、取り組むことへの価値・意義を認識し、使命感を持って臨むことが重要だと私は考えています。私の原点は、19歳の時に飛び込んだカンボジア難民救援でした。当時のタイ＝カンボジア国境には数十万人に及ぶカンボジアの避難民がいました。彼らはタイ国内の難民キャンプに入ることができず、地雷やマラリアの蔓延する国境地帯のジャングルに村を作って散在していました。ほとんどの支援団体は援助しやすい難民キャンプ中心の活動でしたが、私たちは支援が集中しているところや課題は他の団体に任せて、支援が行き届いていないところにアクセスすることを重視していました。困難を避けていたらいい仕事はできません。困難な状況であればあるほど支援を求めている度合いは高く、取り組まなければいけないという考え方は、CWSの支援の姿勢にも通ずるところがあると感じました。

"大切なのは「最も支援を必要としている人たちにも最も効果的な支援を届ける」こと、そして「現状の専門性に縛られず、ニーズに応じてできることは選り好みせずに何でもまずやってみる」こと"

ー防災支援・緊急人道支援で大切にしているアプローチや課題を教えてください。
大切なのは「最も支援を必要としている人たちにも最も効果的な支援を届ける」こと、そして「現状の専門性に縛られず、ニーズに応じてできることは選り好みせずに何でもまずやってみる」ことだと考えています。インドシナ難民救援当時からこの哲学は変わっていません。

また、外部者として現地の支援に関わる意義もあると感じています。革新的な課題の解決や改革を内部の人たちだけで起こすことはとても難しいと思います。内部では、様々なしがらみで突破口を見つけるのが難しかったり、必要なリソースがなかったりするからです。必要だけど誰も手をつけたがらない課題なら、なおさら難しい。そのような課題の解決には外部者のサポートが必要です。外部者の存在は、モラルサポートを提供し、事業を行う上で物的・知的リソースになり得ます。それは外部者だからこそできることなのです。

現在、私が関わっている再生可能エネルギーの分野でも、再エネの普及には３種類の人材が必要だと言われています。その３者とは、若者（若い力）、馬鹿者（一生懸命がむしゃらに向き合える人）、よそ者（外部者）です。

これまでも複数の組織で事業を行ってきて、現地（内部）に良いカウンターパートがいることがインパクトの高い事業にするための必須条件だと感じています。その前提で、外部からいかに有効に支援するかが十分条件。内部のことは内部の人が一番よく知っているので、それは彼らに任せておけばいい。そのうえで、外部にいるからこそできることを見極める必要があります。目標に向けて内部の人が実現できるような武器を持てるように協力するのが、外部者の役割です。内部の人が課題解決に向けて突破口を見つけられるように外部者として協力するということも、CWS Japanが従来から重要視しているパートナーシップの哲学に共通すると思います。

"成長を止めないでもらい、
チャレンジを止めないでもらいたい。”

ーCWS Japanへのアドバイスや今後に期待することはなんですか?
「成長を止めないでもらい、チャレンジを止めないでもらいたい」ということです。
組織も人間と同じで年をとればとるほど保守的になります。組織は安定を求めてリスクを取りたがらなくなります。チャレンジしなくなります。CWS Japanは、今は防災を主要な活動の軸として掲げていますが、未来永劫、防災だけをやっていかなければならないということではないと思います。世界のニーズは日々変化しています。支援が必要なら、相対的に見て他の組織より比較優位のある、しかし未開拓の分野にもリスクをとって踏み込んで、道を切り開いて行ってもらいたいと思います。

これからも、常に原点に立ち戻り、人々に何を求められているのか考えて、CWS Japanができること、やっていく必要があることに対して、勇気をもってチャレンジしていって欲しいと思います。

インタビュー相手: 龍 信之助 様
（医療法人社団RMDCC理事長
/虎ノ門ヒルズ歯科・医科　龍クリニック院長
/肢体不自由者卓球協会　理事
/株式会社　龍虎企画　代表取締役社長
/CWS Japan理事）

ーCWS Japanを知ったきっかけはなんですか?
15年程前に、小美野さんが私の歯医者に患者さんとして来たのがきっかけで、CWSを知りました。その当時はCWS Japanはなかったのですが、小美野さんのお仕事を聞いたところ、退職してCWSというNGOの活動でアフガニスタンに渡航すると聞き驚きました。アフガニスタンは戦争が起きている危険な国というイメージがあったため、そのような国に支援活動のため渡航すると聞いて感銘を受けたのを覚えています。それから、小美野さんが日本に帰国するたびに私の病院に顔を出してくれました。CWSのバンコク事務所に赴任するときも、交流は続きました。

当時の私が持っていた「NGO」のイメージは、金銭的報酬をもらわず、ボランティアベースでやっている団体でしたが、小美野さんとの出会いやCWSの活動を通して、NGO業界には人道支援を専門とする組織や人がいること、海外にはその人道支援のプロフェッショナルとしての地位が存在することを知りました。

2011年3月11日の東日本大震災をきっかけに、小美野さんが日本への帰国を決めた時は災害が発生してわずか数日後でした。都内も混乱していた状況で、宿泊先がまだ決まっていないことを知り、私の家をしばらく貸したこともありました。その時点で組織は存在していませんでしたが、私の中では、そこでCWS Japanとしての支援活動が始まったと認識しています。CWS Japanが正式に設立されて以降、現在は理事としてもCWS Japanに関わっています。

"NGO業界には人道支援を専門とする組織や人がいること、海外にはその人道支援のプロフェッショナルとしての地位が存在することを知りました。”

ーCWS Japanと連携して良かったことはなんですか?
私は医者ですが、親も周囲の友人も医者であったこともあり、社会に貢献をするということは、常にやるべきことだと認識していました。その方法はたくさんありますが、お金だけを出し続けるだけの支援は、持続的ではないとも感じていました。

東日本大震災が起きて1週間後に、小美野さんや他のメンバーとレンタカーで石巻まで向かいました。そこで実感した災害現場のリアリティーが私にとって非常に大きな経験になっています。まず、現場に訪れ、船がお墓の上に乗り上げていたり、車両があり得ない場所に流れていたりといった視覚的な情報が入ってくることで、被災地の被害のスケールを実感しました。それよりも記憶に残っているのは、被災者の人から聞くお話しです。お話しを聞いた方の母親が自宅で亡くなっていたそうですが、その方は母親の死に悲しむ余力もなく、生きるために必死だという心境を打ち明けてくれました。食べ物・飲み物が全くないという困難を、一つの災害によって、現代の日本で多くの方が経験していることに衝撃を受けました。

大震災によって、日本は長らく支援する側にずっと身を置いてきたところから、支援をされる側になりました。そんな状況のなか、海外からCWSのようなプロの人道支援組織や災害後の復興に関する知識を持っている人物が海外から日本に入ることのインパクトは大きかったのではないかと思います。

"ハードとソフトの両面で日本の防災の大きな潜在力を感じました。これらの経験は今後起こりうる首都直下地震などの大規模災害の備えを考えるきっかけになりました。"

また、甚大な被害を受け、ライフラインやインフラ、食料等の様々なモノへのアクセスが難しかったなかでも、人々同士の暴動が起きていないことにも衝撃的でした。津波の被害は確かに甚大でしたが、震度が強かった地域でも建物の倒壊が起こらなかった場所もあったことから、ハードとソフトの両面で日本の防災の大きな潜在力を感じました。これらの経験は今後起こりうる首都直下地震などの大規模災害の備えを考えるきっかけになりました。

ーCWS Japanへのアドバイスや今後に期待することはなんですか?
CWS Japanの強みはお金や人を送り出しているのではなく、学術者や専門家とともに、知識・知恵を配布しているというところだと思います。それはとても大きな役割だと思いますし、大変意義のある活動だと思っています。そのような活動をもっと広めていくことが必要です。
そのためには、メディアでの発信、啓蒙や普及啓発、企業などの多様なアクターとのネットワーキングなどを積極的に行っていく必要があると考えています。

資金調達に関しては、短期的には組織として寄付が得やすいような体制にするなどの方法がありますが、長期的に、またマクロな視点では、寄付文化のない日本の文化や風土を、CWS Japanのような団体に資金が集まるように変えていくことが必要だと感じます。それがよりよい防災の文化の醸成にも繋がっていくと思います。

私は人道支援の専門家ではありませんが、違う分野からの知識や視点をもって協力する意義はあるのではないかと信じていますし、CWS Japanが今後、組織として成長するための次のステップを踏めるように、私もできることを模索し、手助けをしたいと思っています。

インタビュー相手: 小宮山 栄 様
（イマニシ税理士法人社員税理士・公認会計士/株式会社パイオラックス取締役監査等委員/年金積立金管理運用独立行政法人経営委員兼監査委員）

ーCWS Japanを知ったきっかけはなんですか?
現在勤務する税理士法人代表者である今西浩之の公認会計士事務所で、CWS Japanの会計監査を行っており、その補助者として2016年6月期の監査に携わったことが、CWS Japanを知ったきっかけです。その後継続的に会計監査の従事者や合意された手続の業務従事者として、CWS Japanの会計全般を見させていただいております。

ーCWS Japanとの仕事でなにか良かったことがありますか?
2016年4月に現職に転職するまでは大手監査法人に勤務しており、事業会社・自治体の会計監査やアドバイザリー業務は数多くこなしてきましたが、NGO団体の会計監査に携わることはありませんでした。しかしながらCWS Japanの会計監査に関わることにより、新たな会計分野を勉強するきっかけになり、またNGO団体がどのような活動を行っているのか、より深く知ることができました。さらに、CWS Japanが行っている助成金事業に係る合意された手続の実施により、中東やアジアの諸外国における厳しい状況をうかがい知ることができました。

"CWS Japanの強みは海外とのネットワークがあることだと考えます。このことによって、世界的なコロナ禍の状況においても、継続して人道支援を行い続けることができているのだと思います。"

ーCWS Japanへのアドバイスや今後に期待することはありますか?
CWS Japanの強みは海外とのネットワークがあることだと考えます。このことによって、世界的なコロナ禍の状況においても、継続して人道支援を行い続けることができているのだと思います。今後も途絶えることなく支援活動を行っていただきたいと願っています。私はCWS Japanの活動を、会計面でご支援させていただければ、幸甚に存じます。

Interviewee： Dr, Manu Gupta
（Founder, Seeds India）

—How did you first get in contact with CWS Japan?
Initially, I met Takeshi through ADRRN annual gathering in Bangkok, around 2008-2009.Since then on, we got to know each other through our work in ADRRN, particularly with creation of innovation hub that CWS Japan hosts.

—What was the good thing about working with CWS Japan?
Let me start with Takeshi. What impressed me was that he was spending a lot of time in Afghanistan and I was quite surprised how well he knew about the country. I asked him what motivated him to be there, and I remember him giving me a very interesting story about his exposure and how he went back to Afghanistan to work after his initial visit.

When we met, he was traveling a lot between Afghanistan and Pakistan. As I was chairing ADRRN at that time, looking at it from such perspective, I thought he was among those who are really committed for grassroots action and with a genuine heart for the people, which is what has always driven me as well. I wanted him to be part of the ADRRN secretariat somehow, and we even had coffee table discussion in Bangkok to plan it out.

"the whole partnership approach of CWS Japan has blossomed and harvested into something good for all."

I respect those who can get the results done, while at the same time, have a sense of humility to learn from others and be sensitive to diverse cultures and norms that are typical to Asia. I see in him all such qualities. Takeshi also helped ADRRN make connections with the humanitarian sector, and with CWS Japan's contribution, we were able to build good relationship with colleagues such as ICVA, OCHA, ELRHA, etc. In that sense, the whole partnership approach of CWS Japan has blossomed and harvested into something good for all.

Out of all the ADRRN hubs, ATIH is doing the best and shining out in supporting the network and the secretariat. For this, I would like to recognize all its good efforts from Ikue (Innovation consultant in CWS Japan) and CWS Japan team who worked really hard to make it happen. I have been a part of advisory board of Humanitarian Innovation Fund at ELRHA and I feel that they consider ADRRN right at the center of their localization strategy. Many people are talking about the partnership, especially how ATIH built its relationship with ELRHA. It is one of the rare examples of real localization where knowledge and experience at the global level acts as enabler unlocking the leadership of global south and to curate ecosystem around it.

> "Both in Japan and India, we need to expand on innovation so that we go beyond just acts of compassion. "

—What are approaches and/or perspectives that you uphold as utmost importance in humanitarian and disaster risk reduction work?

Our greatest challenge is certainly the climate emergency; already we are 1.2 degrees level and we are approaching 1.5 threshold sooner than later, and number of disaster events are doubling every decade. Japan is among the top 10 countries that is affected and impacted by climate change, and it has a role to play, not only in terms of becoming more resilient as a nation, but also take a leading role for promoting climate resilience in the region.

Japan is very resilient from an infrastructure point of view however its social system is facing challenges as recurring climate disasters are disrupting conventional behaviors and practices. Here, I believe CWS Japan should step in. As it hosts the innovation hub, there is a need to revisit 20th century tools and bring in new approaches that improve adaptive capacities of local population. Activities by CWS Japan should not just be confined to Japan, but become a a bridge for scaling impacts throughout the region leveraging the ADRRN network.

—What advice do you have for CWS Japan and what do you expect from CWS Japan in the future?

Building on the achievement so far, the questions is how we can create an ecosystem around it to attract more capital and participation. For example, so many innovations are there in Japan also, and we would like to explore how we can pull them into the humanitarian sector for being able to save lives and reduce losses during disasters.

Both in Japan and India, we need to expand on innovation so that we go beyond just acts of compassion. There is a lack of awareness on innovation ecosystem which I think ATIH should tackle further. I foresee ATIH linking platforms and stakeholders - Japan and Asia - as Japan has lot more respect and acceptability within the region compared to western countries.

Risks require investment. COVID-19 boomed innovation sector as well, for example, camera/image recognition and around vaccines. As such, humanitarian sector is going to take a leap, and CWS Japan is rightly positioned in this changing environment, to play a leadership role. ADRRN can be a platform to create such collaboration on innovation.

ショウ ラジブ様、田島誠様、龍信之助様、小宮山栄様、Dr, Manu Gupta、インタビューへのご協力ありがとうございました。

今回がSTORY with OUR PARTNERS-パートナーの声の最終回でした。たくさんの方々にご協力頂き、改めて感謝申し上げます。ありがとうございました!

▶ これまでのインタビュー記事はこちらをクリック

特定非営利活動法人CWSJapan
〒169-0051
東京都新宿区西早稲田2-3-18
日本キリスト教会館25号室

メールアドレス:
public@cwsjapan.jp
電話:
03-6457-6840

CWSJapan
@Japan_CWS
cws_japan